日本医史学雑誌　第63巻第3号（2017）　321–324

歴史をあむということ
――2017年1月例会報告より――

岡田　靖雄

青柿舎（精神科医療史研究室）

たいへんおおげさな演題であるが，資料集成の編集および，ある精神医学者につきあつまってきた知見，という二つの経験から，おもうところをのべたい．

会員である小峯和茂，橋本明両氏とともに編集した『精神障害者問題資料集成（戦前編）』は，全12巻を刊行しおえた（六花出版）．いまは，この戦後編の史料収集および編集にかかっている．戦後精神科医療史の主要な出来事のなかでも，保安処分（刑法全面改正）――心神喪失者等医療観察法に関するものは，関連分野がひろすぎるので，直接にはとりあげないことにした．資料としていれるのは，一般に販売される成書・一般に通流している雑誌をのぞく，ビラ，資料，小刊行物，各団体の会報，ニュースなどである．

大学闘争がさかんだった時期に精神科では，学会闘争，医局教室闘争，病院闘争がさかんであった．また，島田事件（1954年の幼女殺人事件）で死刑判決をうけた赤堀政夫の冤罪がはっきりしてきたことをきっかけに，赤堀奪還を旗印に，各地に当事者（病者）運動がもりあがってきた．1964年のライシャワ大使刺傷事件――精神衛生法改悪阻止――1965年精神衛生法一部改正という動きのなかで，若手・中堅精神科医の動きが勢いをえ，あちこちで精神障害者家族会が結成されるにいたった．

充分には記録されていない上記のような動きを，資料としてできるだけおさえておきたい．また，闘争といわれるものでは，せめる側とまもる側と，両方の史料もそろえたい．当時の運動には，既成左翼・新左翼の党派抗争もからみついていた（現在の当事者運動にもその影はのこっているようである）．しかし党派感覚ににぶい者には，そこまでみきわめた資料への展望はできない．自分に身ぢかだった出来事については，それにかかわった人あるいは集団への見当はつくが，遠くの出来事となるとそこへたどりつく途がわからない．問い合わせはだいぶだしたが，えられた返事はわずかである．

会報・ニュース・資料・ビラなどをちゃんと保存していた団体はおおくない．医局教室闘争のばあい，警察の弾圧をおそれて，ビラ・資料の類いはどんどんやきすてていったというところもいくつかあった．ビラのばあい，月日ははいっていても，年がはいっていないものもおおく，それをどこに位置づけてよいかわからない（もちろん，その運動の経過をきちんとおさえて，ビラの内容をこまかく検討すれば，いつのものかわかるだろうが）．ほそい情報への糸をどこまでたどっていくかとなると，やる者のその時の気力やもとめたいものへの好みも影響してくる．

“資料集成”など名のると，いかにも客観的にきこえるが，そこには編集者がもっていた視座，現在たよれる具体的な人，そして編集者の主観がかなり影響するのはさけがたいことである．団体によっては会報をちゃんと保存し，さらに何冊かの合本版までつくっているところもある．「資料集成」とはいっても，その冊数には限度がある．そこで，いくつかの団体については，その会報の初期のものだけいれることにした．つまり，集録した団体の運動の全経過を，ここに採録した資料部分でしることはできない．こういった点で，この資料集成は，当時あったいろいろな動きへの案内板であって，つづく研究者がさらに追究してく

れることを期待しているのである．ここにとりあげたような資料をさらに大大的に収集し・整理し・所蔵する資料館ができれば，とはおもうものの，それは一私人のよくするところではない．

さて，こういった収集・編集の過程をへて，将来のためのいくつかの教訓がえられた．

1. 運動にたずさわる者は，資料をちゃんとのこし記録をつくっていく義務がある．また周辺の“ちいさな”運動・動きに目をくばり，会員になる（年会費をはらう）などして，それらの資料を蓄積していかなくてならない．
2. 50年たたないと歴史でないなどいわれるが，動きのはげしい現代では，10年ごとぐらいに関連分野の歴史をまとめていく必要がある．
3. 歴史には歴史がある，といえばよいか．一つの出来事もみる時点によって意味づけがことなってくる．たとえば，ライシャワ大使刺傷事件により，精神科病床増加の勢いがまし精神科医療の監禁的特質がつよまったと評価された（今も，こういう歴史記述がおおくたもたれている）が，増床の勢いにおおきな変化はなく，また措置入院数は事件の前からへりだしていた．山からみえる景色が，歩みをすすめるとかなりかわってくるのとおなじ，といえようか．そこで，上記の，10年ごとにまとめたような歴史も，時間をおいて再検討していく必要がある．
4. 自分がかかわった運動につき記述するさい，自分の主張がはじめからすべてただしいとはかぎらない（考え方は運動のなかでとがれてゆく）．はじめの主張にあやまった点・たりない点があったばあい，そのことをかくしてはならない．できあがった考え方よりは，その考え方がどのように形成されていったか，が，後の者にとってはまなぶところがおおきい．
5. 一般に歴史の資料としてもちいられるのは，文字化されたもの，あるいは，よりひろく，形をあたえられたものである．だが，上にみてきたように，文書化された資料がちゃんとのこっているとはかぎらない．その穴をうめるものとして，聞き取り（聞き書き，oral history）が重要である．聞き取りでは，きく側の準備不足，かたる側の忘れおよび都合わるい点の隠し（意識的，また無意識の）に注意する必要があるし，また記録はのちからの検証可能な形でのこさなくてはならない．いずれにせよ，聞き取りは，文章が無味乾燥な部分を活人劇化することができる．なお，日本語で“かたり”は，“語り”でもあり“騙り”でもある．

内村祐之（ゆうし）は，戦後の精神医学界では第1級の超大物である．この人を調べの直接対象とはしてこなかったが，いろいろしらべていくと，内村の影がちらつくことがしばしばあった．最近とくに津川武一（たけいち）（1910–1988，共産党から立候補して衆議院議員当選5回）のことをしらべていくと，内村との関係がもっともおおきくうかびあがってきた．こういうなかでえられた知見をつらねていくと，一つの内村像がうかびあがってきた．

内村（1897–1980）は，内村鑑三の息子，高等学校時代には左腕投手として当時最高の野球スターであった．1936–1958と東京大学精神病学教室を主宰していた．わたしは学生時代にその臨床講義をきいた．精神科医となることに思いをさだめていた身にとって，内村教授はあこがれの人であった．1958年に松沢病院にうつるまで，2年間内村教室にいた．

講義のなかで内村は，“教室の図書を赤門まえの古本屋にうった男は，すぐに教室から追放した”とかたった．また“Forscherになれぬ者はArztになれ”といった（その医学部は医者でなく研究者をそだてることを本領としていた）が，おれがなるのはArztだとおもった．医局にはいってみると，内村は医局員から敬遠されていて，むしろかわいそうにみえた．

松沢病院にうつってみると，当時の林暲（すすむ）院長に内村が敵意をもっていたことがたえずきこえてきた．内村は門下の優秀な論文の発表をおくらせることがあった．温泉地での学会のあとの宴会の冒頭に内村は“父鑑三はルソーと同様に晩年に被害妄想をもっていたようだ”とかたった．神経研

究所（教授退官後は内村はそこの所長）にクレベリン教科書の初版があるというので，何人かでその複写をつくったところ，扉に“榊俶〔初代教授〕寄贈　精神病学教室”の印の脇に“内村祐之寄贈　神経研究所”としるされていた．冲中重雄を中心として神経学部門が日本精神神経学会から独立しようとしたときに，それに強硬に反対したのは内村で，それより日本では精神医学と神経学（診療科名では“神経内科”という不思議な呼称を背おわされている）とは手をくめなくなっている．

松沢病院にいた奥田三郎は，その論文の半分を内村にけずられていた．奥田によると，内村（当時松沢病院長兼任）は松沢にくると“君ら僕がたおれてはこまるだろう”と炊事から肉を1 kgぐらいずつもちだしていた．奥田の伝記には，戦争中上の者の密告により警察の取り調べをうけたことがかかれている．その著書にといあわせると，上の者がだれかはきいていないが，内村のようだ，とのことであった．

ライシャワ大使刺傷事件につづく精神衛生法改悪阻止につづく法改正の動きのなかで，日本精神神経学会精神衛生法改正対策委員会は，厚生省の精神衛生審議会（内村祐之会長）への意見書をまとめた．それをだれが内村会長にわたすかという段になって，審議会委員にもなっている委員会委員3人（1937年入局などの大先生）がいずれも“いや，ぼくは”とその役をいやがった．委員会事務局がわたすことになったが，3人は内村元教授をこわがっている様子がはっきりみてとれた．

さて，津川武一は1939年に入局するとすぐにうけもった，今いう大動脈炎症候群（脈なし病）患者の症例報告を同年末にちかい東京精神神経学会でした．1942年の『中央公論』誌にのった石上玄一郎（いそのかみ）「精神病学教室」は，同病の患者をうけもって大動脈弓写によって同病の本態解明につきすすむことが，患者の生命におよぼす危険を心配する医師に対し，学問のためにすすむことを命じる教授の姿をえがきだしている．受け持ち医が津川を，教授は内村をモデルにしていることがあきらかで，内村は石上とは津川のペンネームとみて，ひどくおこった．津川はいくつかの小説では，内村から教室をおわれたというにちかい書き方をしている．わたしが2度この問題につき津川にたずねたときは，あれは当直のとき石上（弘前高等学会での友人）がきて，あの患者のカルテをみて小説にしたんだよ，などいったが，その語り口にはあいまいさがのこっていた．

ところで，1941年の日本精神神経学会総会では，内村自身が津川との連名でこの症候群につき発表し，のこる抄録には“詳細は追つて原著として発表の予定”とある．では，この原著はどこへいったのか．1940年入局の先輩が3人あつまった機会に，この問題をきいたら，“あれは内村先生がなくしたんだよ”との答えが口をそろえてかえってきた．この答えをえたのちしばらくは，小説にかかれたので内村が津川に仕返ししたのか，とかんがえていた．だが，時間的順序を整理すると，総会発表は1941年3月，そして石上の小説がのったのは1942年の10月号である．この時間間隔からすると，内村による論文なくし→津川から石上への材料提供，とみるほうがただしいようである．津川は戦後に詳細な日記をつけた人であるが，内村の葬式に参列したとき内村夫人に，あの小説は自分の作ではないと了承をもとめた，とあるだけである．正義の，つよい人であるかにみえた津川は，この問題についてはごまかしとおしたのであり，そこには，教授をやめたのちも権力をもちつづけていた（とみえた）内村への恐れがあったに違いない．津川は1941年8月に召集されて敗戦にいたっており，もう1度論文をかきなおす余裕はなかった．このことが津川の後半生をかえた可能性は否定できない．

これまでのことをつなげると，うかびあがってくる内村の人間像は，えらい父をもちながら，競争心がはげしくて，門下に優秀な人がでるのをおさえつけようとした，かなり小心で，戦争中は自分の身をまもるのに汲汲としていたようだ，というものである．

それでも，わたしがしる内村はある種の高貴さと権威とをたもっていたようで，精神科のつづく2教授にくらべればはるかにましな人柄であった．同級生で教授になったなかにも，“あいつ，

つかまるんじゃないか”といわれていた人もいた．わたしのような人間に目をつけられたばかりに気の毒だ，という感情がわかぬでもない．

こういった内村像を今内村単独で公けにしてしまっていいか，というためらいを感じている．ほかの人とならべて論ずる機会がくるかもしれない．

以上の報告につづく討論では，大学闘争ではげしくたたかった医療関係者がその後どういきているか，とう問題が提起され，また，医学史，医学史研究にかかわる重大な情報を入手しているが，発表したときの影響の大きさをおそれて発表できずにいる，との二人の発言があった．